

今年も熊本市中学校国語教育研究会に一日参加させていただきました。本研究会では、毎年講演をさせていただき、そのあと「読むこと」部会で授業づくりについて先生方と意見を出し合っています。研究者と実践者との協同的学びによって、授業づくりにあたっての様々な課題が話し合われます。

本研究会の最初に、会長の上妻校長先生が、「根拠をもとに理由を考え合う力を高めること」の重要性について話されました。そして、研究部長さんから、来年の県大会へ向けて、改めて「根拠・理由づけ・主張」の3点セットを用いた学びについて研究・実践を深めることが確認されました。本研究会では、平成24年の全国大会開催に向けて、その2年前から熊本県の中学校の先生方は全ての領域に3点セットを導入した学びを実現してきました。そこから生み出された対話型の協同的な学びは、中学校でもこのような実践ができるのだと全国の先生方に感動をもって受け入れられました。

本研究会で、私は、いつも同じ話にならないように、常に新たな理論と実践の統合による実践提案をすることを心掛けています。そして、それが先生方の明日の授業に生かしていただける具体的な授業提案となるように、体験型の学び合いも取り入れています。しかも、それが単なる表面的なものまねで終わらないように、提案した実践にはきちんと理論があり、その理論を応用しながら、多様な生徒の実態に応じて、先生方の豊かな発想を生み出すことができるような講演にしたいと思っています。

また、この研究会に将来の教師を夢見ている学生たちも参加させていただくようにしています。たとえば、今回は、昨年の読み部会で先生方が悩んでいらっしやった「君は最後の晩餐を知っているか」という評論文の批評読みを提案しました。その提案までに、学生たちと一緒に教材研究を行い、中学2年生の生徒はどこは読めて、どこは読むことが難しいかということについて議論を重ねてきました。その中で、学生たちが読み飛ばしていたり、単に形式的に読んでいたりする場合には、それでは中学2年生に学びはおこらないのではないかと指摘し、どのような読みを行うべきかを立ち止まり、考え合いながら授業プランを練り上げていきました。ここでも、私と学生たちの協同的学びがあるからこそ双方に学びが引き起こされていくのです。

PISA調査以来、考える学びの重要性が叫ばれ、学習指導要領もかなり変わりました。その中に「批評すること」が導入されています。しかし、こうした読みの方法は、すでに明治・大正期の頃から生徒の側からの学びを求めた若き教師たちが模索した跡が実践記録として残っています。

今回は、この批評読みにメタ認知の条件的知識を導入して提案を行いました。授業の実際については後日、論文として発表したいと思います。大学の授業では、学生たちが論理展開について「ああでもない、こうでもない」と考え合いながら、「ああ」や「そういうことか」という発見のある学びがおこりました。学生たちは顕在化された表現や文章構成に潜在化された筆者の思いや願い、見方・考え方に出会い、読むことの楽しさを味わいました。そして、考えを交流し合うためには、客観的な根拠をもとにして、理由づけに自分の

既有知識・経験を引き出すことが大変重要であることを学び合っていきます。こうして学生たちが実際に読み取ったことをもとに、次は先生方に見ていただく授業のプランに向けて学生たちと協議を重ねていきます。授業の台本づくりです。ここで生徒の具体的な発言を考え合う中で、理由づけの質がさらに高まっていくのです。

こうして出来あがった授業の台本をもとに、講演会では、学生たちを相手にした授業を再現します。講演後、「学びを苦手にする生徒にも是非行ってみたい」「二学期からの学びが楽しみになりました」という言葉をいただきました。さらには、「学び合っていた学生たちの姿から多くのことを学んだ」「学び合うことが大切なのだと改めてわかった」という言葉もいただきました。

毎年新しい授業提案を考えていくことは大変なことではありますが、こうした場が国語教育研究者としての私や将来教師になる学生たちにとって大変多くの学びを与えてくれます。

これからの時代、研究者や実践者、学生たちを巻き込んだ協同的な学び合いの場こそがいろいろな教育課題へ向けて必要になってくると考えています。